2016／秋

季刊 福井県和紙工業協同組合

和紙だより

■目次 「和紙原料問題特集」

越前和紙への提言 田中求さん……1頁
レポート 局納用ミツマタ出荷……2
レポート 和紙原料問屋モーリ……3
レポート 越前和紙の場合……3
情報欄……4

―越前和紙への提言―

■田中 求（たなか もとむ）
1972年、静岡県生まれ。東京大学農学生命科学研究科助教、九州大学持続可能な社会のための決断科学センター准教授等を経て、2016年より高知大学地域協働学部講師。専門は環境社会学。1995年からの高知県吾北村柳野地区（現、いの町）で林業経営、和紙原料、山村文化に関する調査を皮切りに、山の財産としての和紙原料問題に取り組んでいる。

■田中求さん（和紙原料栽培・管理支援）「原料農家の側に立つ繋ぎ役」

●深刻な国産原料の不足

私は元々林業が専門で、植林や商業伐採が地域社会に与える影響について日本や海外の農山漁村で研究してきました。和紙原料に関わり始めた契機は、一九九五年冬の高知県いの町の山村での森林所有者への調査でした。戦後、山村では植林が進んだものの、小規模な林家を中心にその多くが現在まで林業収入を得られずにいます。そのような林家が多い仁淀川中流域の柳野地区で二ヶ月間、植林や管理の状態を調査した際に、あちこちで大きな甑（こしき）で蒸されたコウゾを見かけました。昭和四〇年代まで、柳野では焼畑が行われており、焼畑用地にミツマタと一緒にスギを植え、山のコウゾ畑にも植林するなど、植林は和紙原料栽培の減少の理由の一つになっていました。柳野は全国でも有数の和紙原料産地で、現在でも黒皮で千貫弱のコウゾが生産されており、これは全国生産量の約六％に相当します。私は海外などでの研究を続けながら、柳野にも通って農家の手伝いをしつつ、やめてしまうというコウゾやミツマタの畑を引き受け、新たな株や品種の植え替え、獣害対策などを試みています。いつの間にか畑は五反余りになり、学生達に手伝ってもらうこともあります。

二〇一四年に日本の手漉き和紙技術がユネスコ無形文化遺産に登録されたことで、原料を巡る状況は大きく変わりつつあります。登録を受けた和紙は国内コウゾのみを使用することとされており、特に茨城県大子町の「那須コウゾ」は深刻な品不足となっています。高知県でも原料が足りずに探し回る紙漉きさんが増えるようになりました。

九州大の大学院生さんたちと一緒にコウゾ畑の管理作業

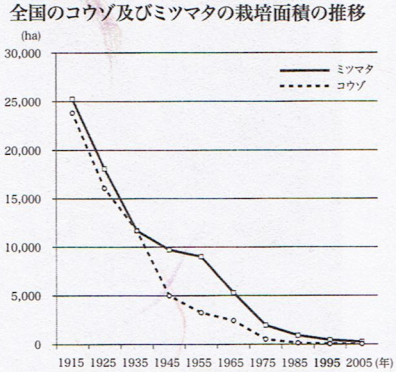
●国産原料は減っている？

国産和紙原料そのものは、植林や転作の広がり、生産者の高齢化、獣害、買い取り価格の低迷などで生産量が激減した一方で、二〇一〇年前後には各地で売りさばけずに原料が余るという現象が生じました。高知県のある農協では二千貫ほどのコウゾ黒皮が売れ残り、大子町でも白皮に加工しても売れないからと、コウゾの原木が大量に山に廃棄されました。熊本県でも契約栽培をしていた組合が減反を余儀なくされました。

この背景としては、輸入原料や木材パルプなどの利用が広がり、国産原料のみを使う紙漉きさんがごく一部になったこと、和紙需要の低迷、農家の高齢化や獣害により栽培管理が十分にできず質が落ちたこと、農家が栽培し続ける気持ちになるような買い取り価格ではなくなったことなどが挙げられます。

紙漉きさんたちからすると、どこかに原料はあるだろう、国産原料も全く無くなることはないだろう、と認識していたかもしれませんが、どの産地に行っても原料栽培は風前の灯火です。農家の多くは自分の原料が紙になった姿を見たことがなく、買い取り価格も低迷し、細いコウゾは買い取ってもらえないことも多くなりました。苦労して育て加工したコウゾが二〇一〇年前後には売れ残ったことも記憶に新しく、「あるもの、できた分を出すだけ」「今年で終わり」「やめても誰も困らない」と消極的な言葉ばかりが聞こえてきます。

全国のコウゾ及びミツマタの栽培面積の推移



出典：農林省大臣官房統計課（1926）及び日本特産物協会（2012）より田中求作成

●原料農家の側に立つ情報・人的交流

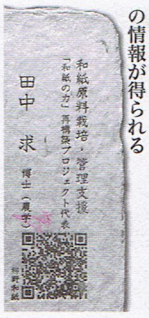
「十年前に来てくれていたらいくらか違ったかもしれない」、新潟や美濃の紙漉きさん、日本画家など十四名の方々が泊まり込みで収穫や加工作業の手伝いに来てくれた際に、大子町のコウゾ生産農家がつぶやいた言葉です。良いコウゾを作っていた農家が次々と亡くなり、三年ほど前から生じ始めたイノシシやイノブタによる食害でやる気を削がれていた農家にとって、和紙に関わる人達が一緒に畑に入り、重たいコウゾを運び、表皮取りなどの加工作業をして、原料栽培の苦労を知ってもらうのは初めてのことでした。柳野の農家も各地から紙漉きさんや輸出業者、大英博物館員、映画監督など多くの人が訪れ、「大事に思っても

らえるなら、もう少し作ってみようか」と話すようになりました。

現在、各産地で自らコウゾを栽培する動きがありますが、同じ品種を植えても大子町や高知と同じ質のものができるとは限りません。コウゾは、土や水はけ、日当たり、雨量、風など様々な自然条件によって成長が左右され、それは繊維の質にも影響します。だからこそ、昔から良い原料を作り続けてきた地域を大事にし、良い畑は放棄される前に受け継いでいきたい。大子町にも柳野にも、今ならコウゾ栽培の「聖地」のような場所があるのですから。

茨城県大子町のコウゾ畑

私は原料農家の側に立って様々な情報を伝えられないかと考え、原料や畑のこと、鎌や鍬、表皮を取る包丁を作った鍛冶屋、畑の来歴、持ち主、収穫や加工の方法、担い手、紙にしてくれた漉き手のことなどを名刺に付けたQRコード経由で見ることができるようにしています。色んな人達をつないでいきながら畑の管理、人、技術、情報、流通の工夫などを提示していくことで、和紙や原料を作ってきた地域がきちんと残っていくと良いなあと思っています。



名刺のQRコードをたどり、栽培地域の情報が得られる

■局納用ミツマタ出荷-福知山市夜久野町

京都府の北西部、福知山市夜久野町の住民が、今年一月、山間部に繁茂するミツマタを収穫し、「国立印刷局　中国みつまた調達所」の指定加工業者（岡山県真庭市）に紙幣用局納として二・七トン収め、一定の利益があった。

●経緯

ミツマタの生産は、平成一六年当時の資料によると下げ止まっていた。これには印刷局が、生産契約に基づいて政策的に買取していた紙幣用「局納ミツマタ」の存在が大きい。局納は偽造防止のために、蒸し釜や流通経路までナンバリングして管理され、加工施設は同局の登録が必要だ。その後、民主党政権時代の平成二二年に事業仕分けで、値段の高い国産品の買取が見直され、安い中国やネパール産の輸入に切り替わった。おかげで四国を中心とするミツマタ栽培農家は壊滅状態となった。昨年同局が使ったミツマタ白皮二〇トンのうち、国内産は一〇トン。ネパール地震で品薄になったので、国内での出荷元を求めている。

ある日、テレビのニュース番組で徳島県のミツマタ栽培農家の話題を見ていた湯口さんは、ミツマタならここにも沢山あるなあと思い、地区の定期会合でそのことを仲間に話した。繁茂している面積も相当広いので、使えるかもしれないという話となり、たどり着いたのが紙幣用原料を管理している「中国みつまた調達所」だった。

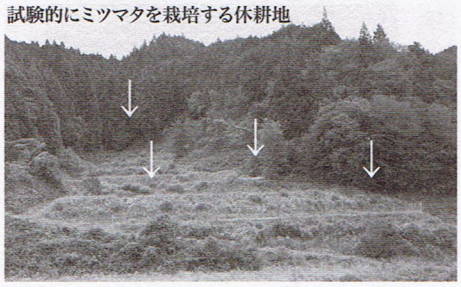
ミツマタ特産研究会」事務局長の中島俊則さん

山奥に繁茂するミツマタ

戦前から戦後にかけ、この辺りの山では雑木を伐採した後、和紙用のミツマタを植え、収穫して皮をむき、村に回ってくる仲買人に売ったという。住民の高齢化とともにミツマタ栽培はすたれたが、適度な日陰と水のためか、手入れせずとも一気に広がり、現在林道沿いなどに五〇haほど茂っている。岡山の調達所の専門官に見てもらったところ、材質的にも規模的にも大丈夫と評価され、直径四～五㎝の原木を切り出し、束ねて納品した。

●持続可能な特産物を目指して

福知山は耕作放棄地が市全体の二四％、六七三haあり、農業振興や過疎地対策をどのようにしていくかという基本的な課題がある。今里地区の山間部の管理は過去には「生産森林組合」という法人組織にしていたので、林道や作業道が多く付けられており、山の奥まで軽トラックが入っていけるのが強みだ。収穫や運搬には大変都合が良い。平成二八年四月一日、地区の住民十三人で「ミツマタ特産研究会」を立ち上げ、今年は二八年度の京都府の「小さなチャレンジ事業」に申請し、承認の目処もついた。その助成金を利用して、休耕地で試験的にミツマタを栽培し、栽培法などを探る予定。


試験的にミツマタを栽培する休耕地

研究会事務局長の中島俊則さんは「まずは自然に群生している今あるミツマタを収穫して販売するとともに、今後休耕地での栽培が可能なら、二通りのやり方で回転率もよく出荷していけます。自生しているものは一回刈ると次に芽が出て、収穫できるまでには三～四年かかりますが、畑で肥培管理すれば毎年刈ることができるそうです。将来、夜久野町に加工施設も建設できれば、持続可能な体制作りも夢ではない」と語る。

ミツマタは獣害もなく、長期保存が可能。繊維は柔軟で細く光沢があり、印刷適性に優れている。紙幣用に限らず、昔から箔合紙、かな用書道用紙、美術工芸紙、透かしの材料などに使用されてきたから、和紙産地の需要も見込める。また、可憐なミツマタの花は香りも良く、アロマや石鹸に利用している例もある。

案内していただいた山奥のミツマタ自生地は、手入れの行き届いていない薄暗い森林とは違い、適度な木漏れ陽があった。想像以上に大きな面積で、栄養状態の良い感じで群生しているミツマタ山は、まさに宝の山だった。

■「情報共有で安定した仕入れルートを」
―和紙原料問屋(株)モーリ

日本の和紙原料問屋は各地に小さな取扱店はあるが、主なところは、モーリ以外には全国に四社程度だという。今回は、愛媛県四国中央市にある明治二七年創業の(株)モーリを訪ねた。現在の和紙原料の取扱品目は、ミツマタ(国産・中国産)、楮(国産・タイ産)、ガンピ(フィリピン産サラゴ)、マニラ麻(フィリピン産アバカ)、パガス(サトウキビ)、竹パルプ、化学パルプなど、多岐にわたる。専務の毛利治正さんにお話を伺う。

倉庫の様子

●外国産原料を求めて

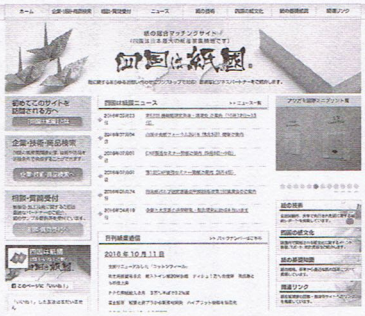
外国産を扱い始めたのは、国産原料が不足し始めた昭和四十年頃から。高度成長期の生活様式の変化で、生活に密着した落とし紙、障子や襖などの紙が使われなくなり、和紙の需要落ち込みと共に、原料栽培農家が次々とやめていったからだ。危機を感じた幾つかの産地の漉き場や和紙メーカーはグループを作り、中国、韓国、タイ、フィリピン、ベトナムなどアジア各地を研究しながら視察し、原料の買い付けも行った。その中には、八尾和紙「桂樹舎」の先代、吉田桂介氏、大因州製紙の創業者、塩義郎氏などがいたという。原料として使えなかったものも随分あったが、製紙メーカー、問屋、商社が一体となって現地における加工指導を行い、安定した品質と供給を目指し、徐々に体制が作られた。

●オープンな情報の共有

つい四、五年前までは那須楮も余り、モーリで買ってくれないかとのオファーもあった。手漉き業者も原料問屋も買支えができず、必要な時にしか買わないので、農家は作りすぎたら捨てなければいけない。買ってくれないのだったら要る分だけしか作らない、高齢化もあり、ついにはやめる農家がバタバタ増えた。そこに、ユネスコ登録の産地が急に欲しいと言って来ても、全く供給が追いつかなかった。

「需給のバランスが許容量を超え、今までの仕入れルートを無視して売買に走ったので、問屋同士の調整もつかず、市場が混乱してしまった。余波で、何とか国産楮を仕入れたいとの動きで、高知の楮も値段がかなり上がった」

外国産は、人件費も上がり、品質を確保できる栽培人の確保も徐々に難しくなってきているが、今後はより日本産に近い加工を行うことのできる中国産が最も重要になってくるという。国産に関しては「漉き手の望む原料や栽培情報を共有し、相互に都合をつけることが必要」と治正さんは語った。



紙情報の共有するため設置されたポータルサイト「四国は紙國」
http://www.shikoku-kami.com/

■和紙原料仕入れの歩みと挑戦
―越前和紙の場合

一九三二年、初代岩野平三郎は、漉き屋が問屋に支配されることなく自立するには、自らの力で原料を精選して調達する力を持たねばならないと訴え、越前製紙工業組合(現、福井県和紙工業協同組合)創設に尽力した。当初から和紙原料の共同購入を主目的に掲げていた組合は、現在、機械抄きも含め組合員数六十軒。大所帯の原料購入のため、これまでにも多くの原料や素材を調査し、扱ってきた。組合事務所には、昭和六十年代からの原料輸入の可能性を探る海外視察団報告書や原料栽培の技術指導報告書などが大切に保管されている。現在組合で仕入れを担当している山下泰央さん、組合理事長の石川浩さんにお話を伺う。

石川理事長

組合仕入れ担当の山下さん

●輸入外国産原料の現況

組合員の全員が原料購入を百%組合に依存しているわけではない。高級紙や特殊な和紙を漉くところでは自前で仕入れ、昔からお付き合いのある問屋から仕入れる所もあるが、ネリも含め、八～九割は何らかの形で組合を利用している。国内産原料も使用しているが、外国産の原料も多く、主にタイ楮、中国楮が使われている。パラグアイで収穫していた楮も、扱う現地のコーディネーターが亡くなり、もう入ってこないという。タイ楮は油分が多いが、適材適所で使えば問題はない。中国楮は日本の苗を移植して山東省などで栽培されているもので、油分は出ず、まずまずの品質であるが、中国産だけに委ねてしまうのも不安があるという。日本の殆どの割り箸が中国産だが、白くするために薬品を使い、残留しているという問題が取り沙汰されており、楮の白皮についても同じような問題が起こらないとも限らない。又、輸入ものはコンテナ輸送なので、まとまった量の注文が必要で、小口では価格メリットがなくなる。

●第一次、第二次原料不足

第一次原料不足は、昭和三十年代中頃～後半、機械抄き和紙の製造が始まった時期だった。当時の機械抄き用の原料は、現在で言う「木材パルプ」ではなく、コンピュータ用MCR紙などの「パンチカード(IBMカード)」を大手製紙メーカーが再生紙として抄いたもので、フィブリル化が済ませてあり、地球釜という丸い蒸解(じょうかい)用のお釜で解かして使っていた。コンピュータがデジタル化されると、この通称「カード」は使われなくなり、原料として確保が出来なくなった。

第二次原料不足はここ十年くらいのことで、和紙業界の衰退とともに国産の原料農家が次々にやめていった時期。農家はもう商売にならないとわかった時点で、後継者も育

てなかった。原料問屋は外国産の扱いを増やしていき、農家を大切にしなかったことも原因しているらしい。安い外国産が出回ると、国産の高い楮をあえて使わなくなる。この間、経済もデフレ基調で来ている中、末端商品の価格に反映することができない。価格を上げると、すぐに印刷特性の良い洋紙を選択されてしまい、和紙が益々使われなくなるからだ。「結局、和紙業界全体の低迷が遠因と言えるかもしれません」と山下さんは事の難しさを語る。そこへきて、ユネスコの無形文化遺産登録による原料の抱えこみと那須楮産地を始めとする深刻な獣害が原料不足に拍車をかけた。

●新しい試み

平成二二年、旧今立町ではキネリも含めて三十五軒の原料栽培農家があったが、平成二五年には五軒にまで減った。危機感を感じた組合では、平成二六年十一月に「越前紙和紙原料生産部会」を立ち上げた。生産部会は県の特用林産物再生事業の助成金を利用して、原料確保のための様々な方策を練る。昨年は原料の原木を買い、農家に安く分け、栽培してくれる所も三、四軒増えた。一方、農家がやめてしまうと苗の入手も困難になるとの懸念から、池田町の五〇㎡くらいの畑に、約百本の楮を植え、苗床として利用する。地元の和紙造形作家と福井県丹南農林事務所の担当者が管理を行い、住民参加型の栽培を行う。収穫できるまでには三年かかるが、出来のいい苗と収量のいい株を残していき、徐々に作付面積を増やしていく。三椏も今年は観光予算で百本植え、雁皮栽培の勉強会も数回開催している。

越前市の南東部の山間地帯、池田町の試験楮畑

石川さんは「原料不足で共倒れになってはいけませんので、全国の産地と連携して安定供給、価格安定を目指し、お互いに原料を都合しあうようなことはできないでしょうか?」と語る。

●県と協力して

福井県丹南農林総合事務所の林業・木材活用課では、平成二七年から越前和紙組合や地域の人達と協力して、楮、三椏の植え付けを行っている。木材だけではない豊かな森林資源「ふくいの宝の山」の特用農産物を振興していく狙いだ。商品開発・生産拡大に入る品目と文化や生産技術を後世に残し、伝統継承していく品目に分けられ、後者に楮、三椏、くず、オウレンなどが位置付けられている。課長の黒田さんは「地域のいいものを磨いて、それを持っているだけではなく、来て、見て、体験、滞在してもらい交流人口を増やし、買ってもらうという方向に導きたい」と語ってくれた。

福井県丹南農林総合事務所の小藤さんと黒田さん

情報欄

●イベント情報

■第33回伝統的工芸品月間

国民会議全国大会　福井大会

○全国大会・記念式典:平成28年11月24日(木)
　鯖江市文化センター

○全国伝統工芸士大会・シンポジウム
　:11月24日(木)　鯖江市文化センター

○合同懇親会　:11月24日(木)　芦原温泉

○伝統ふれあい広場

○日本伝統工芸士作品展

○福井県伝統工芸品展　他
　:11月25日(金)～27日(日)　サンドーム福井

○工房ガイドツアー(一般・バイヤー)
　:11月25日(金)～27日(日)　各産地

■オランダ・ジャパンフェスティバル2016紙漉き体験

時:平成28年11月23日(日)

場所:アムステルダム市　Stadsplein広場

■平成29年　越前和紙祈願祭・漉き初め式

時:平成29年1月5日(木)9:00～

場所:　卯立の工芸館

■平成29年　新年賀詞交歓会

時:平成29年1月5日(木)11:00～13:00

場所:　生涯学習センター今立分館

■越前和紙展～日本画の紙を極める～(仮題)

「作家達を支えた越前和紙」

時:平成29年2月6日(月)～11日(土)

場所:　東京　日本橋　小津ギャラリー

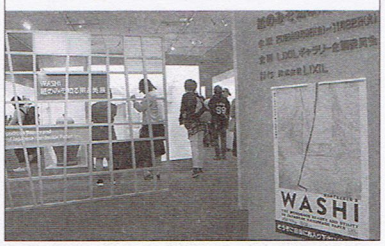
■福井県伝統工芸士連合会展

時:平成29年2月10日(金)～22日(水)

場所:　東京　伝統工芸青山スクエア

■LIXIL大阪で「WASHI-紙のみぞ知る用と美」展開催

大阪の中心地、梅田のグランフロント大阪のLIXILギャラリーでは、9月9日～11月22日、昔から和紙を使って様々な道具を作ってきた日本人の知恵と道具に焦点を当てた展覧会が開催されている。付随して10月10日、フォーラムも開催され、高知県立紙産業技術センター所長、関正純氏の講演も行われた。会場には和紙ファンが訪れ、氏の話に聞き入った。



編集後記

原料不足問題を取材していて、3.11の影響が殊の外大きく影を落としていることに今更ながら、驚いた。またユネスコ登録は登録された対象物だけでなく、有形無形の人や体制など、周りの総合的環境にもよく配慮しないと持続的な運営は苦しくなるとよく言われる。方向性が少しでも示せたのなら、嬉しい。(よ)

季刊・和紙だより 第52号(2016年秋号)　発行日:2016年10月20日　和紙だよりURL→http://washidayori.jimdo.com/
発行人:福井県和紙工業協同組合　石川浩　〒915-0234　福井県越前市大滝町11-11　TEL: 0778-43-0875　FAX: 0778-43-1142
編集所:Office YOMOSA　〒606-8172　京都市左京区一乗寺河原田町37-1 #506　Tel/Fax: 075-702-6466　E-mail: myomosa@zeus.eonet.ne.jp
編集人:右衛門佐美佐子・田中裕子　印刷所:有限会社新進堂印刷所(京都府宇治市)　用紙:機械漉き大礼紙(石川製紙株式会社製)
※無断での転写・転載はお断りします。